『比較日本文化学研究』第14号（2021）

論　文

高等職業学校日本語専門学習者の日本語コミュニケーション能力の向上について

――「アクションオリエンテッド教学理念」を中心として――

On the Improvement of Japanese Communicative Capability of Japanese Learners in Vocational Colleges

―― Centered on “action-oriented approach” ――

鐘　　丹

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

要旨：日本語の運用力、つまり日本語のコミュニケーション能力を養成するのは、日本語専門教育の最終目標だと言える。中国の高等職業学校（専門知識を３年間学ぶ教育機関）の日本語学習者のコミュニケーション能力の向上に対するポイントを究明し、予想以上の効果を得られる教学方式と就職に必要な教学方式を探し出すことを目的とする。本研究では、アクションオリエンテッド教学法の運用を中心とし、三つのアンケート調査と教育現場の実験対比を通じて、学生のコミュニケーション能力について全面的な調査と詳細な分析を展開した。

その結果、現状及びそれにおける効果的な教学方式を明確にしたうえで、基礎学力の低下、自律性の欠如、学習意欲の不振、思惟・行動の活発さなどの様々な方面で特徴を持っていることが明らかになった。

上記の分析と研究に基づいて、卒業生のコミュニケーション能力の不足・即戦力の不備など、就職において危機的な状況にあることが分かる。本論文の研究結果として、以下の五つの方面から力を入れる必要があると考えている。

① 高等職業学校の日本語専門のカリキュラム設置と改革を行う。
② 日本語専門教育の主導性を教師から学生に切り替える。
③ 多種類の成績判定方式を取り入れる。
④ 適用教材を編成、更新する。
⑤ 一般語学能力とそれ以外の能力を両立させ、伝統教育理念とアクションオリエンテッド理念のバランスを取り、高等職業学校の日本語専門教育の健全な発展を促進する。

以上は、自分なりの考えであり、将来的には高等職業学校と四年制大学の日本語専門教育を比べ、異同点の研究も視野に入れ、研究分析を進められることができればと考えている。

キーワード：アクションオリエンテッド教学理念、高等職業学校、項目教学法、伝統教学法、日本語コミュニケーション能力

Abstract: The use of Japanese and the improvement of communication skills are the ultimate goals of Japanese education. This study explores the factors that improve the Japanese communicative capability of learners in vocational colleges to find effective teaching methods to help students better adapt to the society and job market. Based on the action-oriented approach, this study compares the results of three questionnaire surveys and the educational sites to make a comprehensive analysis of the Japanese communicative capability and adaptation to workplace.

The results show that compared with four-year undergraduate students, students in vocational colleges have features of low basic academic ability, bad self-discipline, insufficient learning intentions, active thinking and behaviors, and strong hands-on skill. Due to the improper use of traditional teaching methods, Japanese majors in vocational colleges have problems in communication skills, which means low combat power, and crisis in employment prospects. Based on the current learning situation of Japanese majors, the “action-oriented teaching approach” will become an effective and necessary teaching method to improve the communication ability of learners, and harmoniously coexist with traditional teaching methods.

This research is expected to play its role in the future vocational Japanese education. The author believes that the study results can be applied to the following five aspects:

1 Course setting and reform of Japanese majors in higher vocational colleges.

2 Turn the leading role of Japanese education from teachers to students.

3 Adopt a comprehensive evaluation method.

4 Preparation and updating of teaching materials.

5 In the meantime, improving the basic linguistic ability and other skills to obtain the balance between “traditional teaching method” and “action teaching method”.

Keywords: action-oriented approach, Vocational Colleges, project-based teaching method, traditional teaching method, Japanese Communicative Capability

１．はじめに

コミュニケーション能力とは、一般的に「他者とうまく交流を図ることができる能力」を意味する。これに対してコミュニケーションスキルとは、人と人の間での交流方法・手法・テクニックを理論付けし、検証を行い技術や知識としてまとめたものをいう。つまり、正しい言葉と適切な文法で意思を疎通する語学能力だけではなく、相手の表情・眼の動きを通して気持ちを推察する、相手に不快感を与えないタイミングで自分の感情や意思を相手に伝える、他人からの理解や信頼をもらい相手の意志と感情を正確に汲み取り、様々な状況に応じて適切な表現を行う、また良い人間関係を上手く築くなど

の非言語的な要素の統合する能力だと言える。

以上から、コミュニケーション能力アップのために、単語・文法・読解などの基本的な内容にとどまらず、各分野の専門用語、日本文化やビジネスマナー等についての幅広い総合知識が必要となる。そのためには、どのようにして学習者を日本人のレベルに到達させるのか、どのように理想的なコミュニケーションの効果を発揮させることができるか、これらは学習者と教育者の双方ともに関心がとても深い。

ソ連時代の著名教育家 N.A.Kaiipob が主張した伝統教学理念では、教師が教育プロセスの中核、つまり、教師が主導の地位を占め、生徒が補助の地位を占めていため、学生は受動的な状態にあることから、学習意欲があまり高くないとされた。

逆に､アクションオリエンテッド教学は､新しい能動的な教学理念である。神戸大学留学生センターの實平雅夫とリチャード･ハリソン（2007）は、「能動的学習は知識注入型学習に対して共同・協同・参加型で学習者を中心とするため、積極的に参加し、また問題の解決・知識の分析・知識の創造と評価によって創り上げられ、それが単独であるのではなく、そのプロセスの中で対象者との対話、自分自身との対話につながっていく。」と指摘した。近年、中国の高等職業学校もその理念を積極的に導入している。

本研究では、アクションオリエンテッド教学法を中心として、日本語コミュニケーション能力を向上することについて深い分析と研究を展開した。

２．　先行研究

日本語のコミュニケーション能力と日本語の教育を扱った研究としては、齋藤孝（2004）、木村宗男（1989）、窪田富男（1989）、阪田雪子（1989）、川本喬（1989）、石田敏子（1995）、山口仲美（2001）、王開富（2009）、馬福軍（2007）などが挙げられる。

2.1　日本語のコミュニケーション能力と日本語の教育について

まず、明治大学文学部教授――齋藤孝によれば、豊かな会話とクリエイティブな議論がどのようにして成り立つのかという問題を深く研究した。話の流れをつかむ文脈力、身体を基盤とする重要性を強調しつつ、生きいきとしたコミュニケーションの可能性も論じた。

2.2　アクションオリエンテッド教学法について

王開富は、「アクションオリエンテッド教学法は、20世紀80年代からドイツの職業教育学を盛り上げてきた新興の思潮であり、人間の総合素養と能力の養成において重要な役割を果たし、世界諸国で広く伝えられ飛躍的な発展を遂げてきた」と指摘した。また、この教学法は以下の特徴を持つと記述した。それは、メディアシーン授業法の作成を重視し、学習者を卒業後の実践環境に置き、自分のアクションを通じて知識・技能・経験をさせ、それらの情景によって選択或いは判断を行うことにより、学生の策略性を培うことができる。

2.3　高等職業学校のアクションオリエンテッド教学について

壮国楨の著作『高等職業学校教育のアクションオリエンテッド教学体系についての研究』では「高等職業学校の卒業生は会社で要求される専門知識や職業技能を満たしていないため、望んでいるものは得られず、得られるものは気に入らないという状況であり、したがって、伝統的な教学体系からアクションオリエンテッド教学体系までの転換は、焦眉の急であることは衆目の一致するところである」と述べた。

2.4　職業高等学校におけるアクションオリエンテッド教学について

この教学法で最も影響力がある堀口純子（2003）は、中国の大学における日本語教育の最新動向を明確に説明した。「語彙を覚え、文法を理解し、厳密に訳し、そして暗唱するという方法で、中国の大学における日本語教育は進められてきたが、21世紀になって、学習者主導型授業への転換とコミュニケーション能力の養成が強調されるようになった」と指摘した。

また、李琳（2009）は「職業高等学校の総合日本語の教学について　――アクションオリエンテッドの視角から」では、今までの『総合日本語』授業において、「受験の結果ばかりを重視し、応用性と職業性をあまり考慮していない」、「単語・文法・発音・聴解などの各方面の単一能力を重視し、総合語学能力を無視する」などの諸問題が存在しているため、長期的にこの詰め込み式の方法を行うことで、学習意欲の低下、授業に活気がなくなる。逆に、アクションオリエンテッド教学方式では、学習しながら、知らず知らずのうちに興味が湧き、授業にも活気が出るという結論を得た。

伍毅敏（2010）は、中日のビジネスが盛んになるとともに、複雑型（言語及びビジネスマナー）のできる人材の重要性を述べた。けれども、日本語総合能力の養成において、基礎知識が偏り、実際の運用能力にあまり力を入れないという現状を論述した。結論として、指導を担当する教師は、アクションオリエンテッド教学モジュールで、項目教学法を中心として、学習者自身のアクションを通じて学習意欲を喚起し持続させることができるという結果を得た。

2.5　先行研究と本研究の関連

以上より、これまでの日本語コミュニケーション能力養成方法とアクションオリエンテッド教学に関する研究は実を結んだ。しかし、従来の研究は教学内容及び学習者の心理を議論し、日本語のコミュニケーション能力を向上させるための、学習段階、将来の就職に応じた日本語教育方法の研究はされていない。したがって、本研究では、先行研究を踏まえながら、アクションオリエンテッド教学法の運用を中心として、高等職業学校の学習者のコミュニケーション能力の向上に対するポイントの究明、そして就職の要望に合わせることができる方式を探し出しみようと思う。この研究結果が、これからの日本語学習者及び教育者の一助になればと考える。

３．研究方法及び内容

本研究はアンケート調査と教育現場対比法を行った。

3.1　付録１のアンケート調査表（一）について

高等職業学校の日本語専攻学生（一年生～三年生）で母国語が中国語の学生。

研究対象者：

この調査は､中国武漢職業技術学院の日本語専門学習者120名（男女）を対象とする。

また、日本語学習歴により初級者（学習年数：一年以内)・中級者（学習年数：一年～二年半)・上級者（学習年数：二年半以上）が各40名の割合となっている。

調査目的と説明：

問（１）日本語学習年数

問（２）日本語のコミュニケーション能力における最も難しいポイント

問（３）日本語のコミュニケーション能力に対する効果的な教学方式

また、問（３）～問（５）は、多肢選択式である。日本語の聴解能力／会話能力／翻訳・通訳能力を通じ、高等職業学校の日本語専門学習者の視角から、日本語のコミュニケーション能力に対する効果的な教学方式を知るために設けられた問いである。

3.2　アンケート調査表（二）について

研究対象者

この調査は、中国四つの集中地域（長江デルタ区域、珠江デルタ区域、京津塘区域、東北三省）の在中日系企業200社に対し、郵便・FAX・E メールで実施した。その結果、101社から回答が得られた。その上、有効回答数が94社と回答率が47%に達した。

調査目的と説明：　アンケート調査表（二）

問（２）日本語コミュニケーション能力における日本企業の新卒採用基準

問（３）日本語のコミュニケーションにおける日本語専攻卒業生の不足点

問（４）日系企業の採用における即戦力の重視傾向

3.3　アンケート調査表（三）と平均成績の対比について

研究対象者

この調査は、中国武漢職業技術学院日本語専攻三年生の42名の男女学生が対象。平均成績により、各21名の二つのクラスに分けた。

第三学年の第一学期において、クラス１「伝統教学法」（対照組）で、クラス２「アクションオリエンテッド教学法」（実験組）で授業を実施した。

調査目的と説明：

（１）第一学期の初期と期末の学習意欲・雰囲気・目的の変化

（２）第一学期におけるビジネス日本語授業の平均成績と実験前後対比

（３）第一学期における日本語の視聴授業の平均成績と実験前後対比

（４）第一学期における日本語の会話授業の平均成績と実験前後対比

平均成績の比較調査と説明：

下図のとおり、日本語のコミュニケーション能力の養成は下記の三つの授業がある。

表（3-2）　伝統教学法とアクションオリエンテッド教学法の授業設置

科目	授業の方式	伝統法のコマ	アクション法のコマ
ビジネス日本語 単位（学分）：3 コマ：48	教科書を通じて、日本式ビジネスマナーを勉強する。	48	16
	ビジネスマナーについて日本企業から指導をもらう。	0	8
	日本企業で見学と体験実習を行う。	0	12
	ビジネスモデルを模擬する。	0	8
	日本人留学生と外国人教師の、歓送迎会を開催する。	0	4
日本語の視聴 単位（学分）：3 コマ：48	教科書の音声資料を繰り返し放送する。	48	16
	日本語のニュースを可視化し、放送する。	0	10
	日本語のドラマ・アニメ・映画を放映する。	0	10
	日本語のラジオドラマを放映する。	0	6
	日本語のバラエティ番組を放送する。	0	4
	日本語の流行歌を放送する。	0	2
日本語の会話 単位（学分）：4 コマ：64	教科書の内容を朗読、暗唱したりする。	64	16
	ロールプレイを行う。	0	12
	ある話題について自分の意見を述べ、発表を行う。	0	8
	ある争点をめぐって、口頭弁論を展開する。	0	6
	簡単な短劇を創作、演じたりする。	0	6
	授業で順番にストーリー、笑い話などをする。	0	6
	日本人（留学生・外国人教師等）と交流する。	0	6
	流行語の使用状況を調査し、会話に活用する。	0	4

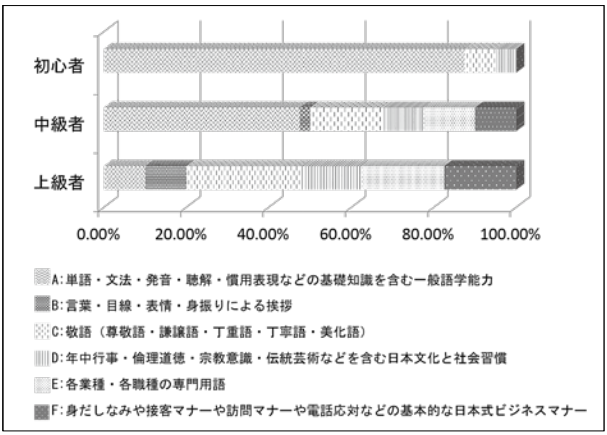
※１単位（学分）が16コマを含める。１コマの授業時間は45 分である。

４．調査結果に対する分析と展開

4.1　分析一：一般語学能力以外の能力について

4.1.1　日本語コミュニケーション能力における最も難しいポイント

下記の図（4-1）より、初級者（１年未満）は、基礎知識「A：単語・文法・発音・聴解・慣用表現など」が弱く交流の難点だと思っているものが圧倒的に多く、87.50％に達した。中級者（１年以上２年半以下）は、基礎知識（A）とそれ以外の能力（B ～ F）の難易度が各50％ぐらいの割合であるが、上級者（２年半以上）は、基礎知識（A）の難易度が10％と極めて低く、逆にそれ以外の能力（B ～ F）が激増し90％となった。要するに、学習年数の増加とともに、一般語学能力以外の内容は、日本語コミュニケーション能力における最も難しいポイントになる傾向が顕著になった。



図（4-1）　日本語のコミュニケーションにおける最も難しいポイント

4.1.2　日系企業の新卒採用の際における最重要なポイント

表（4-2）の結果より、各区域の値は大幅な増減と顕著な差別がない。

では、区域要素を考えずに、各区域の平均比率だけ考査してみる。日本企業の新卒採用基準の７要素に、『A：基礎知識』は、『F：ビジネスマナー』に次ぎ、第二位の地位を占めている。けれども全体から見ると、新卒採用の際、基礎知識（A：23.70%）より、それ以外の能力（B ～ G：76.30%）がかなり重視されている。そのため、実用性が強い能力として要求され、新卒採用の際において一番重要なポイントになっている。

表（4-2）　日本語コミュニケーション能力における日本企業の新卒採用基準

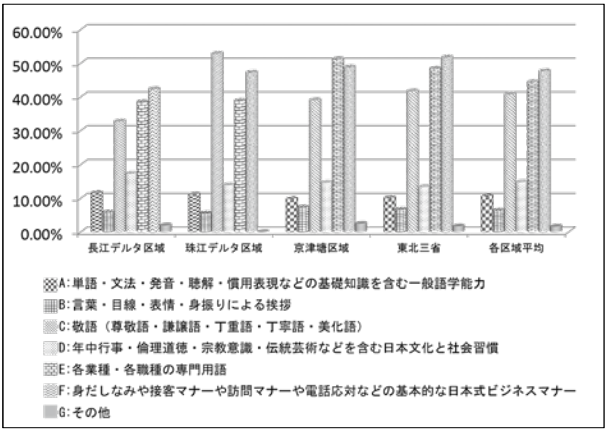
	地域	長江デルタ区域	珠江デルタ区域	京津塘区域	東北三省	各区域平均
	有効回答会社数	26社	18社	20社	30社	23.5社
	有効回答比率	52%	36%	40%	60%	47%
一般能力	A：基礎知識	22.07%	19.85%	24.33%	28.56%	23.70%
基礎知識以外の能力	B：言葉・目線・表情による挨拶	3.96%	5.03%	3.17%	4.88%	4.26%
	C：敬語	17.12%	14.83%	16.25%	15.28%	15.87%
	D：日本文化と習慣	5.28%	4.37%	6.03%	3.54%	4.81%
	E：各職種専門用語	18.63%	22.14%	24.37%	19.72%	21.22%
	F：ビジネスマナー	31.74%	33.02%	24.80%	27.11%	29.17%
	G：その他	1.20%	0.76%	1.05%	0.91%	0.97%
総計		100%	100%	100%	100%	100%

4.1.3 日本語のコミュニケーションにおける高等職業学校の日本語専攻卒業生の不足点

表（4-3）と図（4-3）より、各区域の平均比率から、基礎知識以外の能力（B ～ G）が企業の要求水準に達していないという回答が、約９割を占めた。この状況に基づいて、学生の日本語のコミュニケーション能力の育成が不十分だと言える。

表（4-3） 日本語のコミュニケーションにおける高等職業学校の日本語専攻卒業生の不足点

	地域	长江デルタ区域	珠江デルタ区域	京津塘区域	東北三省	各区域平均
	有効回答会社数	26社	18社	20社	30社	23.5社
	有効回答比率	52%	36%	40%	60%	47%
一般能力	A：基礎知識	11.54%	11.11%	9.76%	10.00%	10.60%
基礎知識以外の能力	B：言葉・目線・表情・身振りによる挨拶	5.77%	5.56%	7.32%	6.67%	6.33%
	C：敬語	32.69%	52.78%	39.02%	41.67%	41.54%
	D：日本文化と社会習慣	17.31%	13.89%	14.63%	13.33%	14.79%
	E：各職種の専門用語	38.46%	38.89%	51.22%	48.33%	44.23%
	F：ビジネスマナー	42.31%	47.22%	48.78%	51.67%	47.50%
	G：その他	1.92%	0.00%	2.44%	1.67%	1.51%



図（4-3） 日本語のコミュニケーションにおける高等職業学校の日本語専攻卒業生の不足点

以上の分析により、基礎知識以外の能力は、上級者にとって最も難しく、新卒採用の際における最重要なポイントであり、日本語専攻卒業生の主な不

足点であることから、今後の教育に大きな力を入れなければならないと考える。

4.2　分析二：日本語のコミュニケーション能力において、高等職業学校日本語学習者に対する効果的な教学方式

4.2.1　聴解能力と会話能力、翻訳・通訳能力から見れば

表（4-4）～表（4-6）より、初級者にとって従来の伝統教学方法は、聴解及び会話と翻訳・通訳能力に最も役立つことが分かる。逆に、中級者と上級者はアクションオリエンテッド教学法を認可した学生が多く、伝統教学法を選択した者は２割に留まった。つまり、学習年数の増加に伴ってアクションオリエンテッド教学方法は、聴解と会話及び翻訳･通訳能力を高める方面で、学習者から高い支持を受けたことがわかる。

表（4-4）　日本語の聴解能力についての効果的な教学方式

	内容	初心者		中級者		上級者	
		人数（人）	比率（%）	人数（人）	比率（%）	人数（人）	比率（%）
伝統教学法	A：教学書の聴力練習	19	47.50	10	25.00	7	17.50
アクションオリエンテッド教学法	B：ニュースを可視化し､放送する。	7	17.50	21	52.50	34	85.00
	C：日本語の歌を放送する。	2	5.00	5	12.50	11	27.50
	D：映画など視聴素材を放映する。	13	32.50	23	57.50	31	77.50

表（4-5）　日本語の会話能力についての効果的な教学方式

	内容	初心者		中級者		上級者	
		人数（人）	比率（%）	人数（人）	比率（%）	人数（人）	比率（%）
伝統教学法	A：資料の朗読や暗唱。	28	70.00	16	40.00	5	12.50
アクションオリエンテッド教学法	B：ある話題について意見や発表を行う。	8	20.00	17	42.50	29	72.50
	C：ある争点をめぐって、口頭弁論を展開する。	2	5.00	9	22.50	15	37.50
	D：簡単な短劇を創作する。	3	7.50	10	25.00	22	55.00
	E：物語や笑い話を話す。	1	2.50	8	20.00	13	32.50
	F：実践会話を練習する。	6	15.00	18	45.00	32	80.00

表（4-6）　日本語の翻訳・通訳能力についての効果的な教学方式

	内容	初心者		中級者		上級者	
		人数（人）	比率（%）	人数（人）	比率（%）	人数（人）	比率（%）
伝統教学法	A：翻訳・通訳の練習	31	77.50	20	50.00	11	27.50
アクションオリエンテッド教学法	B：翻訳・通訳した成果の利点と欠点を説明する。	19	47.50	30	75.00	37	92.50
	C：典型性な社会で必要な通訳訓練を行う。	5	12.50	27	67.50	39	97.50
	D：字幕のない画像素材から通訳訓練を行う。	2	5.00	16	40.00	23	57.50

4.2.2　学期初と学期末における学習意欲･雰囲気･目的の変化から見てみる。

表（4-7）は､双方の学生の対比結果である。二種の教学方法の差はほとんどなく、ほぼ同じ状態であったということが明らかになった。その後、初期と期末における対比結果でも、著しい変化が見えれないことより、伝統教学法でも学習意欲･雰囲気･目的の改善に大きな影響を与えられないと言える。

表（4-7）　第三学年の第一学期初における伝統学生とアクションオリエンテッド学生の対比

	要素	質問の内容	第三学年の初期（実験前）	
			伝統の学生（単位：点）	アクションの学生（単位：点）
学習意欲	知的好奇心	（1）疑問について徹底的に調べたい。	1.86	2.00
	積極行動	（2）授業やそれ以外でも､積極的に日本語を使用している。	1.67	1.57
	深い思考	（3）多様な考え方をする。	1.76	1.76
	満足情緒	（4）学習から強い満足感を感じている。	1.38	1.57
	自発学習	（5）計画を立て、勉強する。	2.19	2.00
学習雰囲気	充実环境	（6）授業で元気と充実だと感じている。	1.19	1.33
	積極環境	（7）授業は発言しやすい雰囲気である。	1.38	1.24
	安心環境	（8）落ち着いて授業を受けている。	1.90	1.95
目的	学習動機	（9）将来の就職・進学のための準備。	1.43	1.33
	興味達成	(10) 自分の興味を理解する。	1.86	1.71
	発展方向	(11) 卒業後の進路・進学の理解。	1.05	1.19

表（4-9）の結果より、わずか一学期のアクションオリエンテッド教学は、実験前より学生の意欲及び雰囲気、目的にも驚いた効果をもたらし各要素の平均値は２点以下から満点の４点に上がった。この結果は、驚きである。

表（4-9）　第三学年の第一学期初と第一学期末におけるアクションオリエンテッド学生の対比

	要素	質問の内容	第一学期初	第三学年の第一学期末
			実験前（単位：点）	実験後（単位：点）
学習意欲	知的好奇心	（1）疑問について、徹底駅的に調べたい。	2.00	3.67
	積極行動	（2）授業やそれ以外でも、積極的に日本語を使用している。	1.57	3.29
	深い思考	（3）多様な考え方をする。	1.76	3.76
	満足情緒	（4）学習から強い満足感を感じている。	1.57	3.38
	自発学習	（5）計画を立て、勉強する。	2.00	3.86
学習雰囲気	充実環境	（6）授業で元気と充実だと感じている。	1.33	3.24
	積極環境	（7）クラスは発言しやすい雰囲気である。	1.24	3.33
	安心環境	（8）落ち着いて授業を受けている。	1.95	3.90
学習目的	学習動機	（9）将来の就職・進学のための準備。	1.33	3.57
	興味達成	（10）自分の興味を理解する。	1.71	3.67
	発展方向	（11）卒業後の進路・進学の理解。	1.19	3.86

表（4-10）と図（4-10）前記のように、両者の一学期間の授業を実施したことにより、第三学年の第一学期末で、双方の学生の間に大幅な相違が見られた。このことから、二種類の教学方法の違いだからこそ引き起こしたものだと言える。

表（4-10）　第三学年の第一学期末における伝統学生とアクションオリエンテッド学生の対比

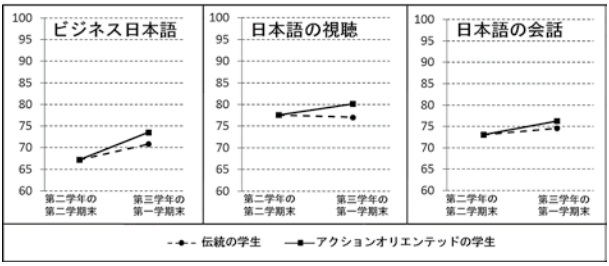
	要素	質問の内容	第三学年の第一学期末	
			伝統の学生（単位：点）	アクションの学生（単位：点）
学習意欲	知的好奇心	（1）疑問について、徹底駅的に調べたい。	1.95	3.67
	積極行動	（2）授業やそれ以外でも、積極的に日本語を使用している。	1.57	3.29
	深い思考	（3）多様な考え方をする。	1.62	3.76
	満足情緒	（4）学習から強い満足感を感じている。	1.57	3.38
	自発学習	（5）計画を立て、勉強する。	2.19	3.86
学習雰囲気	充実環境	（6）授業で元気と充実だと感じている。	1.05	3.24
	積極環境	（7）クラスは発言しやすい雰囲気である。	1.62	3.33
	安心環境	（8）落ち着いて授業を受けている。	1.76	3.90
学習目的	学習動機	（9）将来の就職・進学のための準備。	1.62	3.57
	興味達成	（10）自分の興味を理解する。	1.71	3.67
	発展方向	（11）卒業後の進路・進学の理解。	1.05	3.86

以上の四つの対比結果（表：4-7～4-10）から、伝統教学法は学習意欲・雰

囲気・目的の改善に大きな影響を及ぼさず、逆にアクションオリエンテッド教学法は予想以上の効果を発揮し、効果的な教学方式であるということを十分に説明できる。

4.2.3　第二学年の第二学期末と第三学年の第一学期末における平均成績の対比から見れば

図（4-11）より、第二学年の第二学期末、双方学生のビジネス・視聴・会話の平均成績は70点前後であったが、第三学年の第一学期末では、伝統学生の平均成績の変化は低く、アクションオリエンテッド学生の平均成績は大幅に変化し12－13点ほど点数を上げた。両者の成績を比較するとアクションオリエンテッド教学法はいかに有効な教学法であるということが明らかになった。



図（4-11）　第二学年の第二学期末と第三学年の第一学期末における成績の対比

4.3　分析三：日本語のコミュニケーション能力で、必要的な教学方式

下記より、即戦力は半数を占め、採用の一番重要な要素として考えられる。

表（4-12）　在中日系企業の雇員採用要素を統計した結果

选択肢の内容	平均比率（単位：%）
A：即戦力（訓練や準備をしなくてもすぐに使える戦力）	43.79
B：専門性（特定の領域に関する高度な知識と経験）	20.12
C：会社に対する責任感と忠実感	5.56
D：職業観と就労意識	3.17
E：チャレンジ精神	7.05
F：リーダーシップ（指導者としての素質と能力）	6.17
G：潜在的可能性（ポテンシャル）	8.33
H：出身校	3.43
I：その他	2.38

５．まとめ

本研究は高等職業学校日本語専門学習者の日本語のコミュニケーション能力向上のポイントを究明し、社会で対応できる教学方式を追求することを目指す。そのため、教育現場の平均成績の比較をもとに精確的・科学的に分析を行い論述を展開した。本研究の結果は、調査目的の必要性と科学性を確立し、予定通りの研究目的を達成した。

（１）　基礎能力以外の重要性

日本語コミュニケーション能力において、基礎能力（一般語学能力）以外の能力は、上級者にとって最も難しいポイントである。また、新卒採用の際における最重要なポイントであり、尚且つ、高等職業学校の日本語専攻卒業生にとって最も不足している点でもあった。そのことから今後、これらを重視する必要があると考える。

（２）　日本語コミュニケーション能力を向上させる効果的な教学方式

学習年数の増加に伴い、学生のアクションオリエンテッド教学法に対する興味が高いことが明らかになった。更に第三学年の授業実施の前後より、両者学生の学習意欲・雰囲気・目的及びビジネス日本語・視聴・会話の平均成績の比較結果を通じて、アクションオリエンテッド教学法は、極めて効果的な教学方式だということが十分に説明できる。

（３）　日本語コミュニケーション能力を向上させる必要的な教学方式

在中日系企業は、即戦力を持つ経験者を採用したい傾向が強い。したがって、アクションオリエンテッド教学法は、日系企業の採用したい人材の養成に必要的な教学法だと言える。以上の調査と分析により、アクションオリエンテッド教学法を使いこなすことは、カリキュラムの改革・教育主導性の転変・評価制度の変革・教材の選用・教育方式の変容という五つのことに重点を置き、推進をすべきだと思う。

伝統教育理念もアクションオリエンテッド教学理念も、メリットとデメリットがある。したがって、即戦能力と実践能力を備える人材の養成を図るためには、両者の理念を調和的に共存させ、バランスを取りながら、今後の日本語専門教育の発展を促進する。

本稿では、アクションオリエンテッド教学理念を中心として、自分なりの考えを述べた。これから更に、高等職業学校と四年制大学の日本語専門教育の共通点と相違点の研究にも視野を入れ、今後の課題とする。

参考文献

[1] 石田　敏子（1995）『日本語教授法』 大修館書店

[2] 池田　伸子（19961）「ビジネス日本語教育における教育目標の設定について――文［３］「ウィキペディア（Wikipedia） コミュニケーション能力」 フリー百科事典

[4] 袁　夢（2009）「高等職業学校学校の教学にある問題点と解決策」『現代企業文化』

[5] 實平　雅夫・リチャード・ハリソン（2007）「能動的学習を促す学習環境デザインと化・習慣についての重要性を考える」『ICU 日本語教育研究センター紀要』国際基督教大学

[6] 王　開富（2009）「アクションオリエンテッドの特徴及び意義」『科学咨詢（管理）』

[7] 王　宏偉・翌 宗琪（2010）「高等職業学校学校のアクションオリエンテッド教学法の探究」『黒龍江教育（高教研究と評估）』

[8] 小野　由美子・劉　玉琴（1998）「異文化間のミスコミュニケーションに関する一考察　日・中母語話者の断り表現をめぐって」『鳴門教育大学研究紀要第13巻』

[9] 馬　福軍（2009）「アクションオリエンテッド教学法の応用」『職業技術教育』

[10] 川村　よし子（1991）「日本人の言語行動の特性」『日本語学第10巻第五号』

[11] 木村　宗男・窪田 富男・阪田 雪子・川本 喬（1989）「日本語教授法」桜楓社

教材作成」財団法人交流協会日本語センター

[12] 慧一（2007）「高职高専外语教学中学生自学能力的培养Ⅱ」

[13] 齋藤　孝（2004）「コミュニケーション力」『岩波新書』pp.3-12

[14] 商　伟霞（2009）「高职学生外语学习动机分析及教学　启示」『湖北大学学报』

[15] 姜　大源（2006）「职业教育研究新论」北京教育科学出版社

[16] 迫田　久美子（2002）『第二言語習得研究』 アルク

[17] 壮　国楨（2008）「高等職業学校教育のアクションオリエンテッド教学体系についての研究」江蘇大学出版社

[18] 壮　国祯（2007）「高职“行动导向”教学体系研究」上海华东师范大学

[19] 田中　祐輔　「中国における日本語ブームの一〇年代－『80后』・『90后』日本語学習者への学習状況調査から」2009年度ヤングリーダー奨学基金プログラム（Sylff） フェロー

[20] 藤川　正信（1996）「ターミノロジーとは何か」『専門用語研究　No12』1996年 pp.1-8　専門用語研究会

[21] 堀口　純子（2003）「中国の大学における日本語教育の最近の動向」『明海日本語』

[22] 高木　稚佳（2009）「高校生の『勉強意欲』―進路多様校の普通科と専門学科を比較してー」『都立専門高校の生徒の学習と進路に関する調査　第２部　高校入学以前の状況と学者・進路』 東京大学教育学部

[23] 高見澤　孟（1991）「ビジネスマンのための日本語教育」『講座日本語と日本語教

育14日本語教授法（下）』明治書院
[24]「高职教育＜行动导向＞教学体系研究」（2007）上海：华东师范大学
[25] 陳　岩「中日コミュニケーションにおける一自文化・自言語のノイズとその克服」
[26] J.V. ネウストプニー・宮崎　里司（2002）『言語研究の方法』くろしお出版
[27] 森山　卓郎（2004）「コミュニケーションの日本語」岩波書店
[28] 山口　仲美（2001）「中国の日本語教育」『SCIENCE OF HUMANITY』33号　BENSEI
[29] 吉田　研作（1995）「異文化間コミュニケーションと外国語教育」